

ウィトゲンシュタインの『哲学的探究』を読む

—私的言語に係わる部分—

黒 崎 宏

私にとって最も重要な著作は、ウィトゲンシュタインの後期の主著『哲学的探究』(*Philosophische Untersuchungen*, 1953)である。この本は、序文こそ付いているものの、章だてもなく、ただ通し番号が付いた文章群が並んでいるだけである。しかも、その多くは対話者との問答で構成されており、且つ、答えの無い疑問文もたくさん含まれている。したがってこの本は、ただ読んだだけでは、ウィトゲンシュタインの真意をとる事は非常に難しい。

私が、初めてウィトゲンシュタインを中心に据えた論文を書き、発表した(「力学——そのウィトゲンシュタイン的解釈——」哲学雑誌)のは、1968年、今から20年以上も前の事である。それ以降も私は、間断なくウィトゲンシュタインの様々な文章を読み、研究書を読み漁り、自分でもいろいろと論文を書いてきたわけであるが、この難解な『哲学的探究』が、第Ⅱ部も含めて、読めるようになったという感触を持ち始めたのは、やっここ五、六年の事である。そこで私は、この感触を確かめるべく、この本の徹底解読をして見ようと思いたった。そして最初に出来たのが、「ウィトゲンシュタインの『哲学的探究』——志向性に係わる部分(その1)——」(「成城文芸」第136号, 1991. 9.)と「ウィトゲンシュタインの『哲学的探究』——志向性に係わる部分(その2)——」(「成城文芸」第137号, 1991. 12.)である。私がかこの部分を最初に手がけたのは、最近たまたま私が、志向性に関して考えていたからに他ならない。

そして、私が次に手がけたのが、この「私的言語」に係わる部分である。この部分は、感覚の代表としての「痛み」について、ウィトゲンシュタインが集中的に論じている部分であり、これまでも多くの人によって最もよく読まれ、最もよく議論されて来たところである。しかし、必ずしも良く理解されて来たところではない、と思う。

そういうわけで、以下は『哲学的探究』の中で、特に「私的言語」に係る部分を、独断と偏見であるかも知れないという事を恐れずに、読み且つ解説したものである。私としてはそれなりに、一点の疑惑も残さずに、読み解きたいのである。徹底的に解説したいのである。そのかわり、冗長であると思われる所や強引であると思われる所も、あるであろう。おおかたの御批判を乞いたい。

なお、[]は私の挿入である。また、[]をとばして読んでも、文章は通じるようになっている。一重の下線の原語はイタリックであり、二重の下線の原語は大文字書きである。数字は節を表わすが、イタリックの数字は頁を表わす。

243. 人間は、自らを鼓舞し、自らに命令してそれに従い、自らを責め且つ罰し、自問自答する、という事が出来る。それゆえ人は、独り言しか言わない人々を考える事も出来るであろう。その人々の行動には、独り言が伴うのである。——[もし]或る探検家がいる、その人々を観察し、その人々の言う事に聴き耳を立てるならば、彼はその人々の言葉を我々の言葉に翻訳する事に成功し得るであろう。(そうすれば、その探検家には、その人々の行動を正しく予測する能力が与えられるであろう。何故なら、その探検家は、その人々が意図し決心する事をも聴くのであるから。)

しかし、次のような言語[これが、「私的言語」と言われるものである。]も考えられるであろうか？ [ウィトゲンシュタインは、以下において、この問いに対して否定的に答える。]それは、或る人が自分の内的体験——彼の[感覚、]感情、気分、等々——を、自分一人で使用するために記録し、或るいは、言語表現をする事が出来る言語、である。——[これに対しては、]我々は、その様な事ならば、我々の日常言語で出来ないであ

ろうか〔、と言われるであろう〕。〔勿論、出来る。〕——しかし、私が言わんとする事は、その事ではない。私が考えている言語〔(私的言語)〕の語は、話者のみが知り得るものを——〔具体的に言えば、〕話者の直接的で私的な感覚〔、感情、気分、等々〕を——指示すべきものなのである。〔これが「私的言語」と言われるものである。〕それゆえ他人は、この言語を理解出来ないのである。

244. 〔しからば、〕如何にして語は感覚を指示するのか？ ——ここには何の問題もないように思われる。何故なら、我々は常日頃から感覚について語り、そして、感覚について名前を言っているのであるから。しかし、〔感覚の〕名前と〔それによって〕名づけられたもの〔(感覚)〕の結合は、如何にして確立されるのか？ この問題は、人間は感覚の名前の——例えば、「痛み」という語の——意味を如何にして学ぶのか、という問題と同じである。〔この問題に答える〕一つの可能性は、こうである：語が、感覚の根源的で自然な表出と結合され、そして、その表出の代わりに使われる。〔例えば、〕或る子供が怪我をして、泣き叫ぶ。〔これは、痛みの根源的で自然な表出である。〕そうすると、大人達は彼に声をかけ、そして、〔まず〕彼に〔「痛い！」といった〕叫び言葉を教え、後には〔「ここが痛い。」といった〕文章を教える。大人達は、その子供に〔、痛みの根源的で自然な表出の代わりに、「痛い！」とか「ここが痛い。」といった言葉による〕新しい痛みの振舞いを教えるのである。

「それでは君は、「痛み」という語は〔痛みの根源的で自然な表出である〕泣き叫びを意味している、と言うのか？」——とんでもない。痛みの言語表現〔(例えば「ここが痛い。D)〕は、泣き叫びの代わりをするのであって、泣き叫びを記述するのではない。〔それはまた、痛みを記述するも

のでもない。それはちょうど、泣き叫びが痛みを記述するのではないのと、同様である。]

245. しかば如何にして私は、言葉でもって、痛みの表出と痛みの間になおも割って入る事を望み得るのか？ [そんな事は望み得ない。言葉は、痛みの表出（泣き叫び）の代わりをするのであって、それより奥には入れないのである。]

246. さて、如何なる意味で私の感覚は私的であるのか？ —— [これに対しては、] さよう、私のみが、私が実際に痛みを持っているか否かを、知り得るのであり、他人はその事を単に推測し得るのみである [、と言われるかも知れない]。—— [しかし、] この答えは、或る意味では偽りであり、或る別の意味では無意味である。我々が「知る」という語を、それが通常の仕方で用いられるように、用いるならば、（そして、我々はそれを [それ以外の仕方で] 如何に用いようというのか？ [それ以外の仕方は、用いようがない。]）他人は非常にしばしば、私が痛みを持っているとき、その事を知るのである。[単に推測するのではなく、知るのである。したがって、先の言明は偽りなのである。] —— [これに対しては、また、次のように言われるかも知れない。] それはそうである。しかしそれでも、[私が痛みを持っているとき、] 他人がその事を知るのは、私自身がその事を知る確かさをもって、ではない！ —— [しかし、ここには混乱がある。何故なら、] 人は私に対し、（例えば、冗談ならば別であるが、）私は、私は痛みを持っている、という事を知っている、[など] と言うことは、そもそも出来ないのである [から]。私は、私は痛みを持っている、という事を知っている、という事は、——例えば、私は痛みを持っている、と

いう事以外に——一体何を意味すると言うのか？ [何も意味し得ない。したがって、先の言明は無意味なのである。]

人は、他人は私の感覚を [私の言語のように] 私の振舞いを通してのみ習得するのだ、と言うことは出来ない。——何故なら、人は私について、私は私の感覚を [言語のように] 習得したのだ、と言うことは出来ないのであるから。私は私の感覚を [本来] 持っているのである。[他人にとって、私の振舞いは、私の感覚について何事かを語るときの規準であるに過ぎないのである。]

以下は正しい：他人について、彼は私が痛みを持っているか否かを疑っている、と言うことは無意味ではない。しかし私について、私は私が痛みを持っているか否かを疑っている、と言うことは無意味である。

247. 「君のみが、君はその意図を持っていたか否かを、知る事が出来るのである。」[と人は言いたがる。そして実際、] 人が誰かに「意図」という語の意味を説明するときに、その様に言うことはあり得よう。したがってその様に言う事は、我々は「意図」という語をその様に用いる、という事を意味しているのである。

(但しここでは、「知る」という事は、「君はその意図を持っていたであろう」といった] 不確かな表現は無意味である、という事を意味しているのである。)

248. 「感覚は私的である。」という命題は、「人はペイシェンスを独りで行く。」という命題と比較可能である。[「ペイシェンス」とは、独りで行くトランプ占いの一種である。したがって、「人はペイシェンスを独りで行く。」という命題は、文法的に正しい命題である、という事になる。

しからば、「感覚は私的である。」という命題は、如何なる意味でこの「人はペイシェンスを独りで行く。」という命題と比較可能であるのか？ この問いに対する一つの答えは、両者ともそれぞれ文法的に正しい命題である、という事であろう。(246と251を参照。)]

249. 乳飲み子の笑いは偽りではない、という我々の想定は、おそらく早計ではないのか？ [その通り、早計なのである。]——そして、我々の想定は如何なる経験に基づいているのか？ [如何なる経験にも基づいていない。それは、言語ゲームについての無理解に基づいているのである。]

(嘘をつく、という事は一つの言語ゲームである。それは、他の全ての言語ゲームがそうであるように、学ばなくてはならない。[しかし乳飲み子は、未だ如何なる言語ゲームをも学んでいない。したがって乳飲み子は、嘘をつくことが出来ないのである。それ故、乳飲み子の笑いは、偽りではあり得ず、それ故また、真実でもあり得ないのである。])

250. 犬は、何故痛い振りをする事が出来ないのか？ 犬は、正直すぎる [からな] のか？ [そうではない。] 人は犬に痛い振りをする事を教えることが出来るのか？ [出来ない。] おそらく人は犬に、痛みが無くとも或る一定の機会に痛みがあるかの様に吠える事を、教え込む事は出来る。しかし、それが本当の痛い振りであるためには、その振舞いには、未だなお正しい状況が欠けているのである。[<痛い振り>であると分かる<痛い振り>は、<痛い振り>ですらない。<痛い振り>であると分からない<痛い振り>が、本当の<痛い振り>なのである。そして人は、この意味で犬に本当の<痛い振り>を教え込む事は、出来ないのである。]

251. 我々が「私にはその反対が想像出来ない。」とか「もしそれがそうでなかったならば、一体どうなるのか？」と言うとき、それはどういう意味なのか？ ——例えば、或る人が、私の表象は私的である、とか、私のみが、私は痛みを感じているか否か、等々、を知り得るのである、と言ったとき [、我々は、えてしてそれらを肯定しながら、「私にはその反対が想像出来ない。」とか「もしそれがそうでなかったならば、一体どうなるのか。」とか言うものであるが、一体それはどういう意味なのか？]。

「私にはその反対が想像出来ない。」という事は、勿論ここでは、[その反対を想像するには] 私の想像力が不足している、という事を意味してはいない。我々は「私にはその反対が想像出来ない。」という事で、[私の表象は私的である、とか、私のみが、私は痛みを感じているか否か、等々、を知り得るのである、といった、] その形によって我々に、それは経験的命題である、と信じ込ませるが、しかし実は文法的命題である所のものから [生ずる誤解から]、わが身を守っているのである。

しからば、なぜ私は「私にはその反対が想像出来ない。」と言うのか？
そして、なぜ私は「私にはそれが想像出来ない。」と言わないのか？

例：「如何なる棒も長さを持っている。」これは、例えば次のような事を意味している：我々は或るもの（或るいは、これ）を「棒の長さ」と呼ぶが——しかし、何ものをも「球の長さ」とは呼ばない。さて私は、「如何なる棒も長さを持っている。」という事を想像することが出来るか？ さよう、私はまさに或る棒を想像する；そして、これが [私に出来ること] の全てである。「如何なる棒も長さを持っている。」という命題と結合したこの像のみが、「この机はそこの机と同じ長さを持っている。」という命題と結合した像と、全く異なった役割を演じるのである。何故なら、この二つの像の対比において私は、反対の像（それは、[想像のような] 心的

像である必要はない。)をつくる、という事が何を意味するかを理解するのであるから。[「如何なる棒も長さを持っている。」という命題と結合した像においては、その反対の像をつくることが出来ない。これに対し、「この机はその机と同じ長さを持っている。」という命題と結合した像においては、勿論、その反対の像もつくる事が出来るのである。]

しかし、文法的命題に対する像は、例えば、人が「棒の長さ」と呼ぶものを示す事が出来た。しからば、文法的命題に対する像の反対の像はどうだったのか？ [反対の像は、そもそも存在しないのである。]

(ア・プリオリな命題の否定についての考察 [をせよ]。[ア・プリオリな命題は、文法的命題なのであるから。])

252. 「この物体は大きさを持っている。」という命題に対して、我々は、[そんなことを言う事は]「無意味！」と答える事が出来よう。[その否定形が概念上考えられない以上、肯定形をあえて主張することには意味がないからである。]——しかし、「勿論！」と答える傾きがある。——何故か？ [それは、「この物体は大きさを持っている。」という命題は、その形によって我々に、それは経験的命題である、と信じ込ませるから。]

253. 「他人は私の痛みを持つことが出来ない。」[他人は他人の痛みを持ち、私は私の痛みを持つことが出来るのみ、なのである。]——[では、] どの様な [規準を満たす] 痛みが私の痛みなのか？ [そして] この場合、何が [私の痛みの] 同一性 (Identität [アイデンティティー；この痛みが、他人の痛みではなく、私の痛みである、という事]) の規準なのか？ [ここで、] 考えよ：物的対象の場合において、何が「二つの全く同じ (zwei genau gleichen) ……」について語る事を可能にするのか？

例えば、何が「この椅子は、君が昨日ここで見た椅子 [と同一] ではない。しかしこの椅子は、君が昨日ここで見た椅子と全く同じである。」と言う事を可能にするのか？ 「同一である」という事と「同じである」という事は、違う。前者は存在のレベルでの話であり、後者はそれが有する性質のレベルでの話である。そして、「他人は私の痛みを持つことが出来ない。」と言うとき、それは存在のレベルでの話なのか性質のレベルでの話なのか、という事が問題になる。物的対象の場合について考えることが、この事に気づかせる。勿論、「他人は私の痛みを持つことが出来ない。」と言うとき、それは存在のレベルでの話なのである。]

私の痛みは彼の痛みと [性質において] 同じである、と言うことが意味を持つ限りにおいて、私と彼は同じ痛みを持つ事も出来る。(その通りである。そしてまた、二人の人間が——ただ単に対応する場所ではなく——同じ場所に [同じ] 痛みを感じるという事も、考え得るであろう。例えば、シャム双生児において、この事は実際に起こり得るであろう。[しかし、だからといって、二人の人間が同一の痛みを感じる、という事にはならないであろう。]) [このパラグラフは、「同じ痛み」についての話である。]

私は、この [痛みという] 対象を議論しているとき、或る人が自分の胸を叩き「しかし、そうは言っても他人は [ここに存在する他ならぬ] この 痛みを持つことは出来ない！」と言ったのを、見たことがある。[彼は「同一の痛み」について、言っているのである。] ——これに対する返答は、こうである：人は、「この」という語を力を込めて強調する事によっては、同一性の規準を定義しはしない。「この」という語を力を込めて強調する事は、むしろ我々に、同一性の規準は我々によく知られているのであるが、しかし我々はそれを [忘れていたので] 思い出さねばならないのだ、とい

う事のみを思わせるのである。[私の痛みの同一性の規準は、私の振舞いに表出される、という事である。]

254. (例えば,)「同じ (gleich)」という語を「同一の (identisch)」という語で置き換えるという事もまた、哲学における典型的な方策である。[「同じ」という語と「同一の」という語の違いは、本質的なものではなく、意味における陰影の違いにすぎない、とするのである。そしてその場合には、]あたかも我々は、[「同一の」という語の]意味の様々な陰影について語り、その正しいニュアンスを我々の言葉でうまく表現する事のみが問題であるかの如く、なのである。そして、哲学する事においてこの事が問題になるのは、ただ、或る特定の表現方法 [今の例では「同一の」という語]を使用するという誘惑を心理的に正確に表現するという事が我々の課題であるとき、だけなのである。[しかし、]或る特定の表現方法 [今の例では「同一の」という語]を使用するという誘惑を心理的に正確に表現するという事が我々の課題であるときに我々が「言いたくなる」事は、勿論、哲学ではない。それは、哲学の素材 [、哲学がこれから料理しようとする素材、]なのである。かくして例えば数学者が、数学的事実の客観性と実在性について、えてして語るところのものは、[実は]数学の哲学ではなく、哲学が取り扱うべき素材 [、哲学によってその本性が暴露され、無毒化されるべき素材、]なのである。

255. 哲学は問題を、病気を治すように、治す。[病気を治す、という事は、病気そのものを消す、という事である。同様に哲学は、問題に答えを与えるのではなく、問題そのものを消すのである。この事は一般に、哲学は問題を、解決するのではなく、解消するのである、と言われている。]

256. さて、私の内的体験を記述し、且つ、私自身のみが理解可能な言語〔つまり、私的言語〕については、どうか？〔この場合、〕如何にして私は、私の感覚を言葉で表わすのか？——我々が通常するように、であろうか？それ故、私の感覚語は、私の感覚の自然な表出と結合されているのであろうか？〔そうではない。〕そうであるとすれば、私の言語は「私的」ではない。他人も、私のように、私の言語を理解することが出来るであろう。——しかし私は、感覚の自然な表出を有せず、ただ感覚のみを有するとすれば、どうであろう？この場合、私はただ単に名前を感覚と結合し、そしてこの名前を〔感覚の〕記述に用いるのである。

257. 「もし人間がその痛みを表出しない（即ち、呻かない、顔を歪めない、等々、）とすれば、どうであろう。この場合には、人は子供に「歯痛」という語の使用を教えることが出来ないであろう。」——さて、その子供が天才であり、痛みに対して名前を自ら発明すると仮定しよう！——しかしそうすると、勿論、その子供はその〔発明した〕語で自分〔の痛み〕を〔他人に〕分からせることは出来ないであろう。——かくしてその子供は、その名前を理解しているとしても、しかし、その意味を誰にも説明出来ないのではないか？——しかしそうすると、彼は「彼の痛みに名前をつけた」という事は、どういう事なのか？——如何にして彼は、痛みに名前をつける、という事を行ったのか？！そして、たとえ彼が何をしようと、それは如何なる目的のためなのか？——人が「彼は感覚に名前を与えたのだ。」と言うとすれば、その人は、単なる命名が意味を持つためにも、既に多くの事が言語において前提されていなくてはならないのだ、という事を忘れてるのである。我々が、或る人が痛みに名前を与え

る、という事について語るとき、そこにおいては、—— [痛みに与えられた] 新しい語が置かれるべき場所を示すところの——「痛み」という語の文法が前提されているのである。

258. 以下のような場合を想像しよう。私には或る感覚が繰り返し起こるので、私はその日記をつけようと思う。そのために私は、その感覚に記号「E」を結合し、そして私は、その感覚を持った日には、いつでもカレンダーにその記号を書き込むのである。—— [ここで] 先ず私は、この記号の定義は語られ得ない、という事に注目したい。——とはいえ私はその定義を、私自身に対してならば、一種の直示定義として与えることが出来る [のではないか]！ —— [では] 如何にして [出来るのか]？ 私はその感覚を指示出来るのか？ —— [たしかに、] 通常の意味においては、出来ない。しかし、私がその記号を口に出して言い、或るいは書き記し、そしてそのさい私が、私の注意をその感覚に集中する、——かくして私は、言わば、内的にその感覚を指示するのである。[これなら可能ではないのか？] —— しかれば、この儀式は何のためか？ 何故なら、その様な事は儀式としか見えないから！ 定義というものは、何であれ、記号の意味を確立するものなのである。——いや、記号の意味の確立は、まさに、注意の集中によって起こるのである。何故なら私は、注意の集中によって、その記号と感覚の結合を私自身に刻印するのであるから。—— [そうであろうか。] 「私はその記号と感覚の結合を私自身に刻印する」という事は、[もしそれが何かを意味し得るとすれば、] ただその出来事は、私は未来においてその結合を正しく思い出す、という事をもたらす、という事を意味し得るだけなのである。しかしこの場合、私はその正しさについての規準を持ってはいない。ここで人は言うかも知れない：何はともあれ、私に

正しいと思われるものは、正しいのだ。しかしこの事は唯、ここにおいて「正しい」という事については語られ得ないのだ、という事のみを意味しているのである。

259. 私的言語の規則は、規則の印象であるのか？ [そうである。]
——人が印象を量る [(語る)] 秤 [(規則)] は、秤 [(規則)] の印象ではない。

260. 「とはいえ、私はこれは又しても感覚Eである、と信じている。」
——君は、それを確かに信じている、という事を信じているのだ！

それでは、記号「E」をカレンダーに書き込んだ人は、全く何も書き留めてはいなかったのか？ [その通りである。] ——或る人が記号を——例えばカレンダーに——書き込むとき、彼は何かを書き留めているのだ、という事を、自明な事と見てはいけない。書き留めるという事には、或る機能があるが、しかし記号「E」を書き込んだだけでは、未だ何の機能もないのである。

(人は自分自身に語ることが可能である。—— [しからば、] 他人が誰も居合わせないときに語る人は、みんな自分自身に語っているのか？ [色々である。しかしその時の言語は、私的言語ではない。])

261. 「E」を、或る感覚についての記号である、と呼ぶことに、我々は如何なる根拠を有するのか？ というのは、「感覚」という語は、私にだけ理解可能な言語 [(私的言語)] の語ではなく、我々の共通言語の語なのである [から]。したがって「感覚」という語の使用には、万人が理解する正当化が必要なのである。——そして、「E」が結合しているものは感覚である必要はない；もし彼が「E」と書けば、彼は何かを持っている

のである、——そして、我々はそれ以上の事を言うことは出来ない、と言っても、何の助けにもならないであろう。[何故なら、かく言うとき、]しかし「持っている」とか「何か」という語もまた、共通言語に属するのである[から]。——そういう訳で人は、哲学してゆくと[、具体的には「E」を、或る感覚についての記号である、と呼ぶことの根拠を求めてゆくと]、結局は、そこにおいては人はただ分節化されない音を発するであろうような事態に、至るのである。——しかしその様な音は、或る一定の言語ゲームにおいてのみ、「何かの」表現なのである。[かくして] 今や、その一定の言語ゲームが記述されねばならないのである。[(270を参照。)]

262. 人は言うかも知れない：[例えば、私的な直示定義によって、] 自らに私的な語の説明を与えた人は、その語をシカジカに用いるという事を、今や内的に企てなくてはならない。しからば彼は、その事を如何に企てるのか？ 私は、彼はその語の使用技術を発明する、或るいは、既に手に入れていた、という事を仮定すべきなのか？ [何れでもあり得ない。したがって、そのような事は仮定すべくもない。]

263. 「それでも私は、未来においてこれを「痛み」と呼ぶ事を、(内的に) 企てる事が出来る。」——「しからば君は、それを確かに企てたのか。君は、そのためには、君の注意を君の予感 [——未来においてこれを「痛み」と呼ぶ事が出来る、という予感——] に集中することで十分であった、と確信しているのか？」——[これは] 奇妙な問い [ではないか？]

264. 「ひとたび君が、この語が何を表わしているかを知れば、君はそ

の語を理解するのである、君はその語の全使用が分かるのである。」[勿論、そんな事はない。]

265. ただ我々の想像の中においてのみ存在する表——例えば、辞書 [の一頁] ——を考えてみよ。辞書を用いれば、人は或る語 X の或る語 Y への翻訳を正当化する事が出来る。しかし、この表がただ想像の中においてのみ参照されるとき、我々は、その表を用いての或る語 X の或る語 Y への翻訳の正当化をも、正当化と呼ぶべきであらうか？ ——「さよう、そのときは、その正当化はまさに主観的正当化である。」——しかし正当化とは、[主観とは] 独立した所 [に在るもの] に訴える事において、成り立つのではないのか？ ——「しかし私は、それでも、或る記憶について [確かめるために] 別の記憶に訴える、という事も出来る。(例えば) 私は、列車の出発時刻を正しく記憶しているか否かが分からないので、それを調べるために、時刻表の或る頁の像を記憶に呼び起こす。この場合我々は、同じ事 [(即ち、[主観とは] 独立した所 [に在るもの] に訴える事)] をしているのではないのか？」——そうではない。何故なら、時刻表の或る頁の像を記憶に呼び起こす、という事は、ここでは実際、時刻表の或る頁の正しい像を記憶に呼び起こす、という事でなくてはならないのであるから。もし時刻表の或る頁の記憶像そのものが、その正しさが検査出来ないものだとなれば、どうして列車の出発時刻の記憶の正しさをそれによって確かめることが出来ようか？ ([列車の出発時刻を正しく記憶しているか否かが分からないので、それを調べるために、時刻表の或る頁の像を記憶に呼び起こす、という事は、] あたかも或る人が、今日の朝刊の記事が真実である事を確かめるため、その同じ朝刊をたくさん買うようなものである。)

想像の中で表を参照する事が、表を参照する事ではないのは、想像の中で行われた実験の結果が、実験の結果ではないのと、同じである。

266. 私は、今何時かを見るために、時計を見ることが出来る。しかし私はまた、[時計が狂ったり止まったりしたとき、] 今何時かを推測するために、時計の文字盤を見ることも出来る。或るいは私は、その同じ目的のために、時計の針を私に正しいと思われる位置まで動かす事も出来る。そういう訳で時計の視覚像は、時刻を決めるために、一通りよりも多い仕方で役立ち得るのである。([しからば、] 想像の中で時計を見る [場合はどうか]。[この場合には、正しい、という事があり得ない。])

267. 私は、私の想像の中で造られる橋の大きさの決定を、先ず想像の中で、その橋の素材についての強度試験を行う事によって、正当化しようとした、としよう。勿論これは人が、橋の大きさの決定の正当化、と呼ぶものの想像であろう。しかし我々はこれを、[橋の] 大きさの決定の想像の正当化、とも呼ぶであろうか？ [勿論、呼びはしない。]

268. 何故、私の右手は私の左手にお金を贈ることが出来ないのか？
——私の右手が私の左手にお金を移す事は出来る。[また] 私の右手が贈与の証書を書き、私の左手が受領証を書く、という事は可能である。——しかし、そこから生じる実際上の結果は、贈与 [から生じるどころ] の結果ではない。私の左手が私の右手からお金を受け取った、等々、のとき、人は問うであろう：「さて、だからどうだと言うのか？」そして、或る人が彼自身に私的な語の説明を与えたとき——即ち、彼自身に対して或る語を言い、そしてその際、彼の注意を或る感覚に向けたとき——人は同様に

「さて、だからどうだと言うのか？」と問うであろう。

269. 或る人が或る語を理解していない、という事——[即ち、]その語は彼に対して何の意味もないという事、彼はその語で何かをする術を知らないという事[、等々]——に対する或る規準が行為には存在する、という事を思い出そう。そして、彼はその語を「理解していると信じている」事、彼はその語に或る意味——但し、正しくない意味——を結合しているという事、に対する或る規準が行為には存在する、という事を思い出そう。そして最後に、彼はその語を正しく理解しているという事、に対する[或る]規準が行為には存在する、という事を思い出そう。第二の場合には、人は主観的理解について語る事が出来る。そして、他人は誰も理解せず、しかし私は「理解していると思う」声を、人は「私的言語」と呼ぶ事が出来よう。[(243を参照。)]

270. ここで我々は、日記への記号「E」の書き込みの応用について、考えよう。[258では、カレンダーへの書き込みであった。]私は以下のような経験をした[、としよう]:私が或る一定の感覚を持つときは、[したがって、私が日記へ記号「E」を書き込むときは、]何時でも、血圧計は私の血圧が上がっている事を示している。さて、そうであるとすれば私は、私の血圧の上昇を何等の道具をも借りずに告げる事が出来る、という事になる。[即ち、日記への記号「E」の書き込みを、私の血圧の上昇を示すものとして、使う事が出来る。]これは、有用な結論である。そして今やここにおいては、私がその感覚を正しく再認識していたか否かという事は、[——実はその様な事は、記号「E」が私的言語であるならば、無意味であるはずであるのだが(258を参照。)——]全くどうでもよい事である様

に思われる。たとえ我々が、私は常にその感覚を間違って同定しているのだ、と仮定するとしても、全く問題にならない。そして既にこの事は、この仮定には実質が無い、という事を示しているのである。([「実質が無い」という事については、次のような例を考えてみよう。]我々が或るつまみを回した、としよう。そのつまみは、それによって人は機械のある部分が調節できるかの如くに、見えるのである；しかしそれは、単なる飾りであり、その機械の機構とは全く無関係だったのである。[そのつまみには、実質が無かったのである。]) [記号「E」は、もともとは、私的言語である。しかし、その書き込みと血圧の上昇の間に一定の関係が発見されたのである。したがって血圧の上昇は、記号「E」の書き込みの「徴候」であったわけである。しかし、「私は常にその感覚を間違って同定しているのだ」と仮定しても、その仮定には実質が無いという事は、記号「E」の使用の正しさは、血圧の上昇によって判定されるのだ、と考えるからである。かくして、血圧の上昇は、記号「E」の書き込みの「規準」になるのである。そして、記号「E」は——「痛み」のような——公的言語になるのである。]

しからは、ここにおいて我々が、「E」は或る感覚の記号である、と言う事に、如何なる根拠を有しているのか？ [その根拠は、] おそらく、その記号がこの言語ゲーム [——血圧上昇との関係で用いられる記号「E」の言語ゲーム——] において用いられる仕方 [、である]。——しからは、何故 [その感覚は、その上、] 或る「一定の感覚」である [とされる] のか、したがってまた、何故毎回同じ感覚である [とされる] のか？ さよう我々は、我々は毎回「E」と書く、と仮定している [からである]。 [(290を参照。)] [実は、毎回同じ感覚であるから、毎回「E」と書くのではなく、とにかく毎回或る感覚を感じて「E」と書くから、毎回同じ感覚

である、とされるのである。(350を参照。)]

271. 「或る人間を考えよう。彼は、「痛み」という語が何を意味するかという事を、記憶に留めておくことが出来ず、——したがって、常に何か或る別のものを痛みと呼んでいるのである。——しかし彼は、それにもかかわらず、「痛み」という語を痛みの通常の徴候および前提と一致するよう、用いているのである！」——それゆえ彼は「痛み」という語を、我々みんなが用いるように、用いているのである。ここにおいて、私は言うことが出来よう：[機械についている車で、] 人が回すことが出来る車、しかし、それによって [その機械の] 他の部分が動かされない車、その様な車はその機械には属していない。[「痛み」と呼ばれる何か或るものは、「痛み」の言語ゲームには属していない、というのである。(272, 293および207を参照。)]

272. 私的体験において本質的な事は、実は、各人がそれぞれ [私的体験の] 固有な事例を持っている、という事ではなく、他人もまたこれを、或るいは、何か別のものを、持っているのかどうかを、誰も知らない、という事である。したがって、人類の或る一部では或る赤の感覚を持っており、他の一部ではそれとは別の赤の感覚を持っている、という仮定は、——検証不可能ではあるが——可能であろう。[(293を参照。)]

273. [赤の感覚ではなく、]「赤い」という語についてはどうであろうか。——「赤い」という語は「我々みんなに対峙している」或るものを表わしており、そして各人は、「赤い」という語の他になお、赤についての彼固有の感覚を表わすための語を持たねばならない、と言うべきなのか？

[そうではない。] 或るいは、「赤い」という語は、我々みんなに知られている或るものを表わしており、そして各人に対しては、その他に、各人にも知られる或るものを表わしている、(或るいは、おそらくより適切には：各人にも知られる或るものを指示している、) という事なのであるか？ [そうではない。]

274. 「赤い」という語は私的なものを「表わす」のだ、と言う代わりに、「赤い」という語は私的なものを「指示する」のだ、と言っても、「赤い」という語の機能の把握には、勿論、何の助けにもならない。しかし、「指示する」という言い方は、哲学する際の或る一定の体験に対しては、心理的に適切な表現である。「指示する」という言い方は、「赤い」という語を言うとき、私は[赤についての]私固有の感覚に対し、——いわば自らに、私は既に「赤い」という語でもって何を意味しているかを知っている、と言うために——ちらっと目をやるかの如く、なのである。

275. 君は真っ青な空を見上げ、そして、君自身に対して叫ぶ：「空の何と青いことよ！」——君が、哲学的意図を持たないで、自然にそう叫ぶとき——その言葉は、「この色の印象は私にのみ属しているのだ」という意味で、言われたのではない。そして君は、[場合によっては]この叫びを他人に向けるという事に、何の疑念も持っていない。そして君が「空の何と青いことよ！」という言葉で何かを指示するとき、その何かは空なのである。私が言いたい事は、こうである：[この場合]君は——人が「私的言語」の考察において「感覚の命名」をするときに、しばしば随伴するところの——〈君自身の内面を指示する〉という感じを、持っていない。君はまた、本来は、手で色を指示するのではなく、ただ注意で色を指示す

るのでなくてはならない、とも考えはしない。(「注意で或るものを指示する」という事が何を意味するかについて、よく考えよ。)

276. 「しかし、我々が或る色を注視し、そして、その色の印象に命名するとき、実際我々は〔その名前によって、〕少なくとも或る全く確定したものを意味してはいないであらうか？」我々が或る色を注視し、そして、その色の印象に命名するとき、それは、色の印象を見られた対象から、薄皮を剥ぐように、文字通り引き離すかの如くなるのである。(〔そして、〕色の印象を見られた対象から、薄皮を剥ぐように、文字通り引き離すかの如くなるのである、という事は、我々に「どこかおかしい」という] 疑惑を引き起こすに違いない。)

277. しかし、或る語で人が、或る時は、皆に知られている色を意味し、——また或る時は、自分が今もっている「視覚印象」を意味する、と信じたい誘惑に陥るのは、そもそも、どうしてなのか？ ここにおいて、その一方の誘惑ですら、どうして成り立つのか？ ——私は、これら〔二つ〕の場合において、色に同じ種類の注意を向けはしない。〔第二の場合について考えると、〕私が〔或る語で〕専ら私だけに属する色の印象(と私は言いたいのだが)を意味するとき、私はその色に——私が或る色に「見飽きる事が無い」とときには大抵そうであるのだが——沈潜しているのである。それ故、人が輝く色に注目するとき、或るいは、印象的な色の構成に注目するとき、この〔色に沈潜する〕という] 経験が起き易いのである。

278. 「私は、緑という色が私に如何に見えるか、を知っている。」——さて、確かにこの言葉は意味を持っている！ ——確かにそうだ；[しか

らば] 君は、この命題に如何なる使用を想定するのか? [例えば、この命題を主張する人には、緑のものを持って来させる、緑の色を塗らせる、等々、の命令を与える事が出来よう。]

279. 「しかし私は、私の背の高さがどの位かを知っている。」と言い、そしてその際その証拠として、手を自分の頭の上に乗せる人を、思い描け! [勿論、手を自分の頭の上に乗せても、自分の背の高さがどの位かを知っている証拠にはならない。同様に、注意を緑の印象に向けても、緑という色を知っている事にはならない。]

280. 或る人 [例えば舞台監督、] がいて、例えば、彼が劇場での一場面を如何に想像するか示すために、或る絵を描くとする。そこで私は言う:「この絵には二重の機能がある。この絵は他人に、[一般の] 絵や言葉がまさに何事かを伝達するように、何事かを伝達する。——しかし、この絵はその当人に対しては、なおそれとは別の種類の表現(或るいは、伝達?)なのである。[この絵はその当人に対しては、何事かを伝達するわけではない。] この絵はその当人に対しては、当人[自身]の想像の像なのである。[そして] この事は、他人に対しては、あり得ない。[この絵は他人に対しては、劇場での一場面を想像した当人の想像の像ではない。確かに他人は、この絵から当人のその想像を知る事が出来る。しかし当人は、この絵から当人のその想像を知るのではない。「像」の関係と「知る」の関係は、同じではない。] この絵についての当人の私的印象は当人に対し、或る意味で、当人が想像した事を語っている;しかし、この絵についての他人の私的印象は、その[同じ]意味では、その当人が想像した事を語っているわけではない。」——そして私は、——もし第一の[他人の]場合

に「表現」とか「伝達」とかいう語が正しく用いられているならば——如何なる権利を持って第二の〔当人の〕場合にも〈表現〉とか〈伝達〉について語るのか？ [(273, 294, 367を参照。)]

281. 「しかし、君の言う事は、例えば、痛みの振舞がなければ痛みは存在しない、という事にはならないのか？」——それは、こういう事になるのである：人は、生きている人間、および、生きている人間に似ているもの（生きている人間に似た振舞をするもの）についてのみ、それは感覚を持っている、それはものを見る、盲目である、音を聞く、音が聞こえない、意識のある状態にある、或るいは、意識を失っている、などと言う事が出来るのである。

282. 「しかし童話においては、[生きている人間に似ていなくても、]それでもなお壺が、ものを見たり音を聞いたり出来るではないか！」（確かにその通りである；しかも壺は、喋る事すら出来る [、とすら言いたいであろう]。)

「童話は、ただ事実ではない話を作り上げているだけであるが、だからといって、無意味を語っている訳ではない。」—— [しかし、] 事柄はそれほど簡単ではない。[これに対し、] 壺が喋る、と言うことは、偽りであろうか、はたまた、無意味であろうか？ [と、問われるかも知れない。しかし、] 我々は、如何なる状況で壺は喋ると言うのか、という事について、明確な像を持っているであろうか。[持つてはいない。そしてその意味で童話は、無意味を語っていない訳ではない。しかしもちろん童話は、単純に無意味を語っている訳でもない。]（無意味な詩もまた、例えば、幼児の意味不明な発声が無意味であるような仕方で、無意味である訳ではない。)

それはそうだ；[しかし] 例えば人形と遊んでいるとき、我々は無生物について、それは痛みを持っている、と言う[事があろう]。しかし、痛みの概念のこの様な使用は、二次的な使用なのである。しからば人々が、無生物についてののみ痛みを持っていると言い、人形についてののみ同情した場合を、想像してみよ！ [この場合は——痛みの概念の一次的使用はないのであるから——痛みの概念の二次的使用ではないのではないか？] (〔それでは、次のような場合を考えてみよう。〕子供達が電車ごっこをして遊ぶとき、彼らの遊びは電車についての彼らの知識と結合している。しかし、電車を知らない人種の子供達が電車ごっこの遊びを我々の子供達から教わり、そして、その遊びは「ごっこ遊び」であるという事を知らないで遊ぶ、という事は可能であろう。[ここで] 人は言うことが出来よう：この遊びは、電車を知らない人種の子供達にとっては、我々 [の子供達] とは同じ意味 (Sinn) を持っていない。[同様に、無生物についてののみ痛みを持っていると言い、人形についてののみ同情した場合、そこで用いられる「痛み」とか「同情」とかいう概念は、我々と同じ意味を持ってはいないのである。])

283. 我々には、[人間ではなく] ものである生き物 [——例えば蠅——] できえ何かを感じる事が出来る、という考えすらあるが、それは何処から来たのであろうか？

それは、[先ず] 私が受けた [二元論的] 教育が、私をして私の中に在る感覚に注目させ、そして [次に] 私が、[かくして得た] 私は「感じる事が出来る」という観念を、私の外のものに適用する事によって、であらうか？ [その際] 私は、私が——他人の言語使用と矛盾しないで——「痛み」と呼ぶ事が出来る或るものがそこに ([即ち、] 私の中に) 在ると

いう事を、認識するのであろうか？ —— [もっとも] 私は、石や植物などには、「感じる事が出来る」という観念を適用しはしない [が]。

私が、ものすごい痛みを持ち、そしてそれを持ち続けながら石になってしまう、という事は想像出来ないであろうか。さあ、[その様な事が想像出来るのは] 私が目を閉じているとき [であろうが、そのときは]、私が石 [——痛みを持っている石——] になっているか否かという事を、私 [自身] は如何にして知るのであろうか？ [如何にしても、知り得ないではないか。したがって、その様な想像は、私自身には無意味である。] ——そのうえ、もし私が [痛みを持ち続けながら] 実際に石になったならば、[今度は他人から見ての事になるが、] その石は如何なる意味で痛みを持っているのであろうか？ その石が痛みを持っているという事を、人は如何なる意味で言う事が出来るのであろうか？ [その石には痛みの振舞がないのであるから、普通の意味では、その石が痛みを持っているとは言えない。したがって、その石が痛みを持っていると言えらば、それは定義上、その石が私が痛みを持ち続けながらなった石であるから、であろう。そしてその場合には、その石の何処か或る処に痛みがある事になる。] では、何故この場合、その痛みがそもそも [石という] 持ち主を持たねばならないのか？ [持ち主のない痛みはあり得ないから、であろう。]

そして人はその石について、[その石が痛みを持っているという事が言えるために、] その石は心を持っており、そしてその心が痛みを持っているのだ、と [二段構えで] 言う事が出来るのか？ [そしてそもそも] 心は石とどう関係するのか、痛みは石とどう関係するのか？ [ここには、答えは存在しない。それらの問いは、疑似問題なのである。かくして、次のように言われる事になる。]

人は、[人間および] 人間のように振舞うものについてのみ、それは痛みを持つている、と言うことが出来るのである。

何故ならば [、と言って、以下のような背理法が提出される。]: 人は、身体について、それは痛みを持つている、と言わねばならない、或るいは、もし君が欲するならば、その身体が持つている心について、それは痛みを持つている、と言わねばならない。そうすると、[如何にして身体は痛みを持ち得るのか、という事が問題になり、それを解決しようとして、心を持ち出すと、今度は] 如何にして身体は心を持ち得るのか? [という事が問題になる。しかし、ここには、答えは存在しない。それは、疑似問題なのである。かくして、身体も心も痛みの持ち主ではありえないのである。しからば、何が痛みの持ち主なのか。それは、人間および人間のように振舞うもの、なのである。]

284. 或る石を見て、それは感覚を持つている、と想像せよ! ——
[ここで] 人は自問する: 人は如何にして、或る物に 〈感覚あり〉 とする考えにすら、至り得るのであろうか? そして人は同様に、数にすら 〈感覚あり〉 と出来るのだろうか! ——そこで、もがいている蠅を見よ、— そうすればこの難問は直ちに解消し、痛み [という概念] はここに——即ち、以前には痛み [という概念] に対して全てが言わば順調であったその場所に—— [その使用の] 場を獲得する事が出来るように思われるのである。

そしてまた我々には、死体には痛みは全くない、と思われるのである。——生きているものに対する我々の態度は、死んでいるものに対する我々の態度と、同じではない。生きているものに対する我々の反応と死んでいるものに対する我々の反応は、すべて異なっているのである。——もし或る人が「その様な事は単に、生きているものはシカジカに動き、死んでい

るものはそうではない、という事に基ついている訳ではない。」と言うとすれば、——私は彼に、ここには「量から質への」移行の一つの場合があるのだ、という事を分からせてあげたい。〔生命とか心とかいうものが、実体として在る訳ではないのである。〕

285. [他人の] 顔の表情に対する認識について、考えよ。或るいは、[他人の] の顔の表情に対する記述について、考えよ。——これは、人がその顔を測定してその結果を述べる、という事によって成り立つのではない！ また、人は如何にして或る人の顔を、鏡で自分の顔を見ることなしに、まねることが出来るのか、考えよ。

286. 身体について、それは痛みを持っている、と言う事は、しかし、馬鹿げた事ではなからうか？ ——そして、なぜ人はその事を馬鹿げた事とを感じるのか？ 如何なる意味で、私の手が痛みを感じるのではなく、私が私の手に痛みを感じるのか。

「痛みを感じるのは身体であろうか？」という問いの、論点は何か？ ——それは、如何にして決着がつけられるのか？ 痛みを感じるのは身体ではない、という事は、如何にして妥当とされるのか？ ——さよう、例えば、こうであろう：或る人が彼の手に痛みを持っているとき、(その手が「痛い」と書くのでないならば、) その手が「痛い」と言うわけではない；そして人は、手を慰めるのではなく、痛みを持っている人を慰めるのである；そして人は、[彼の手ではなく、] 彼の顔を見るのである。

287. 如何にして私は、この [痛みを持っている] 人に対する同情で一杯になるのか？ その同情の対象は何か、という事は如何にして示される

のか？（人は言うことが出来る：同情は、或る他人が痛みを持っている、という事の確認の形式である。）

288. 私は、痛みが持続したまま、硬直して石になる。——そして、もし私がここで「痛みの持続に関し」思い違いをしているならば、その痛みはもはや痛みではないであろう！ ——しかし、私がここで思い違いをする事は、あり得ない；私が痛みを持っているか否かについて疑うという事には、何の意味もない！ ——即ち：もし或る人が「私は、私が持っているものは、痛みか、或るいは、そうでない何かである、という事を知らない。」と言うとすれば、我々は例えば、彼は「痛み」という日本語（ドイツ語）の意味を知らないのだ、と考えるであろう。そして我々は、彼にその意味を説明するであろう。——「では、] 如何にして [説明するのか？ おそらくジェスチャーによって、或るいは、彼を針で刺して、「ご覧、これが痛みだよ！」と言う事によって、であろう。彼はこの説明を、他の人々が皆そうであるように、正しく理解するか、間違って理解するか、或るいは、全く理解しないであろう。そして、彼がその三つの内のどれであるかは、他の場合においてもそうであるように、彼のその語の使用において示されるであろう。

さて、もし彼が例えば「おお、私は「痛み」の意味を知っているが、しかし私は、私が今ここに持っているものが痛みであるかどうかは、知らない。」と言ったとすれば——我々は「言葉を失い」、単に頭を横に振るだけであろう。そして我々は彼の言葉を、どう対応してよいか分からない奇妙な反応と、見なさざるを得ないであろう。（それは例えば我々が、ある人が真剣に「私は、私の誕生以前のある時期、……と信じていた、という事を、はっきり記憶している。」と言うのを聞いた時の様であろう。）

私は痛みを持っているか否か、という先の疑いの表現は、言語ゲームには属していない；さてしかし、もし〔(硬直して石になる場合がそうであるように)〕痛みの表出——それは人間的な振舞である——が不可能ならば、私はやはり〔、私は痛みを持っているか否か、という先の〕疑いを持つ事もあり得よう。それ故、私がここで、人は感覚をそれが実際にそうであるのとは違う何かとして把握する事があり得る、と言いたくなるのは、以下の事に由来するのである：もし私が、感覚の表出を有する通常の言語ゲームが破棄された、と考えるならば、私には〔感覚の〕同定についての規準が必要であろう；そしてまた、そうすれば、〔感覚の同定に関し〕誤りの可能性もまた存在するのである。〔しかし、実際には、感覚の表出を有する通常の言語ゲームは破棄されない。したがって、〔感覚の〕同定についての規準は必要ではない。そしてまた、感覚の同定に関する誤りの可能性も存在しないのである。〕

289. 「私が「私は痛みを持っている。」と言うとき、何れにせよ私は、私自身に照らして正しいとされるのである。」——〔かく言うとき、〕これは何を意味しているのか。それは、「もし他人が、私が「痛み」と呼ぶものを知り得るならば、彼は、私は「痛み」という語を正しく用いている、という事を認めるであろう。」という事を意味しているのであろうか？
〔そうではない。だいたい、他人が私が「痛み」と呼ぶものを知る、という事は意味を為さないのである。〕

或る語を正当化無しに用いるという事は、その語を不当に用いるという事を、意味しない。〔私が「私は痛みを持っている。」と言うとき、私は正当化無しにそう言うのである。〕

290. 私が私の感覚を同定するのは、勿論規準に基づいてではなく、私と同じ表現を用いることによって、である。〔(270を参照。)] しかし、それによって「感覚に関する」言語ゲームは、実は終わるのではなく、始まるのである。

しかし「感覚に関する」言語ゲームは、——「その言語ゲームにおいて」私が記述する——感覚から始まるのではないのか？ ——「記述する」という語は、ここにおいて、おそらく我々を異にかけている。私は、「私は私の心の状態を記述する。」とも「私は私の部屋を記述する。」とも言う。人は「ここで」言語ゲームの多様さを思い起こすべきなのである。

291. 我々が「記述」と呼ぶものは、特定の目的のために使用する道具である。さて、エンジニアが目の前に持っているところの、寸法が入った機械の平面図、立面図、断面図を考えよ。〔これらは記述であるが、明らかに、エンジニアが特定の目的のために使用する道具である。これに対し、] もし人が記述を、事実についての言葉による像である、と考えるならば、それは、人々を誤解に導く何かを持っている：〔何故なら、] 例えば人は、〔言葉による像として〕——物がどう見えるか、物がどういう状態にあるのか、といった事をただ単に模写していると思われるところの——我々の〔部屋の〕壁に掛かっているような像のみを、考えるであろう〔から〕。(言葉による像〔というもの〕は、いわば、遊んでいるのである。)

292. 君は君の言葉を事実から読み取るのだ；〔より具体的に言えば、] 君は事実を規則に従って言葉に写し取るのだ、〔など〕といつも考えてはならない。何故なら、たとえそうであっても君は、〔解釈が尽きた様な〕特別な場合には、〔如何なる〕導き〔も〕無しに規則の使用を行わねばな

らないのであるから。〔(201を参照。)]

293. 私が私自身について、私は私自身の場合からのみ「痛み」という語が何を意味するかを知るのだ、と言うとすれば、——私は他人についても、彼は彼自身の場合からのみ「痛み」という語が何を意味するかを知るのだ、と言わねばならないのか？ そして、そうであるとすれば、如何にして私は一つの場合をそんなに無責任に一般化できるのか。

さて、人はみな自分自身についてこう語る：「私はただ私自身 [の場合] からのみ、痛みとは何であるかを知るのだ！」——〔そこで、] 人はみな或る箱を持っている、としよう。その中には、我々が「かぶと虫」と呼ぶ或るものが入っているのである。〔しかし] 誰も他人のその箱の中を覗くことは出来ない。そして、皆、彼のかぶと虫を見る事によってのみ、かぶと虫の何たるかを知るのだ、と言うのである。——ここにおいて、人はみな夫々の箱の中に異なったものを持っている、という事も可能であろう。否、それどころか、箱の中のものは絶え間なく変化している、という事すら想像可能であろう。——さてしかし、このような人々における「かぶと虫」という語が、それでも〔彼らにおいて、きちんと] 使用されるとすれば、どうであろう？ ——そうであるとすれば、〔「かぶと虫」という語の] その使用は、或るもの名前としての使用ではない。箱の中のものは、そもそも——或るものとしてすら——その言語ゲームには属さないのである：何故なら、その箱は空っぽですらあり得るのであるから。——その言語ゲームは、箱の中のものを素通りする事によって、「短絡させられる」事が可能なのである；箱の中のものは、たとえそれが何であれ、なくされ得るのである。

即ち、こうである：もし人が、感覚の表現の文法を「対象とその名前」

というモデルに従って構成するならば、その対象は、無関係なものとして
 [言語ゲームの] 考察から抜け落ちるのである。[(272と207を参照。)]

294. もし君が、彼は彼が記述する私的な像を前方に見ているのだ、と
 言うとするれば、何はともあれ君は、彼が前方に持っている [と思われるそ
 の] ものについて、或る想定をしているのである。そしてその想定とは、
 君は、彼が前方に持っている [と思われるその] ものを、より詳しく記述
 出来る、或るいは、[現に] より詳しく記述している、という事である。
 もし君が、彼が前方に持っている [と思われるその] ものが如何なる種類
 のものであり得るのかについて、全くおぼろげな観念すらも持ち合わせて
 いない、という事を認めるならば、——それにもかかわらず君が、彼は前
 方に何かを持っている、と言いたくなるのは、一体何によってなのであろ
 うか？ 君が、彼は前方に何かを持っている、と言う事は、あたかも私が
 或る人について、「彼は何かを持っている。しかし私はその何かが、財産
 であるのか、借金であるのか、はたまた空っぽの金庫であるのか、知りま
 せん。」と言う様なものではないのか？ [他人の私的な像について語るこ
 とは、無意味なのである。]

295. そして「私は、私自身の場合からのみ……を知るのである。」と
 いう命題は、そもそも如何なる種類の命題であるべきなのか？ [それは]
 経験命題 [であろうか]？ そうではない。—— [では] 文法的命題 [で
 であろうか]？ [文法的命題としては、間違っている。]

そこで私は、人はみな自らについて「私は、私自身の痛みからのみ、痛
 みの何たるか知るのである。」と言う事を、思い浮かべる。—— [但し私
 は、] 人は実際に「私は、私自身の痛みからのみ、痛みの何たるかを知る

のである。」と言うとか、或るいはまた、人はその様に言うかも知れない、という事ですら、[思い浮かべるのでは] ない。さてしかし、もし人がみな「私は、私自身の痛みからのみ、痛みの何たるかを知るのである。」と言ったとすれば、——それは一種の叫びであり得よう。そしてその叫びは、たとえ情報としては無内容であるとしても、それでもなお一つの像なのである；そして、何故我々はその様な像を念頭に浮かべようとしてはならないのか？ 「私は、私自身の痛みからのみ、痛みの何たるかを知るのである。」という言葉の代わりに、[いっそのこと、それに代わる] 或る寓意像を思い描け。

さよう、我々が哲学するときに我々[自身]の中を覗くならば、しばしば我々にはまさにその種の[寓意]像が見える。[それらは]紛れもない我々の文法の比喩的表現[である]。[勿論それらは]事実ではなく、いわば、語法のさし絵[なのである]。[この点を見誤ると、我々は哲学の病に罹るのである。]

296. 「その通りである。しかし私自身の中には、やはり、私の痛みの叫びを伴って或るもの[——痛みの感覚——]が在るのだ！ そしてそのために私は、痛みの叫びを発するのだ。そしてこの或るものは、重要なものであり、——且つ、恐ろしいものである。」——我々はこの事を一体誰に伝えるのか？ そして、如何なる機会に？

297. 勿論、やかんの中で水が沸騰するとき、蒸気がそのやかんから立ち昇る；そしてまた、蒸気の像がそのやかんの像から立ち昇る。しかしもし人が、[そのときは]やかんの像の中でも何かが沸騰していなくてはならない、と言おうとしたら、どうであろう？

298. 非常に我々は——我々自身の感覚を指示しながら——「これは重要なものである。」と言いたがるという事は、既に、如何に我々には何の情報も与えない事を言う傾向が強くなるか、という事を示している。

299. 我々が哲学的思索にふけるときには、シカジカと言わざるを得ない、[とか、]シカジカと言いたい思いに抗し難い、[とか]という事[が多いが、しかしそれ]は、或る想定をせざるを得ない、とか、或る事態を直視している、[ないしは]知っている、という事を意味してはいない。

300. 人は言うかも知れない：「彼は痛みを持っている」という言葉で行われる言語ゲームには、[彼の]振舞の像が属するのみならず、[彼の]痛みの像もまた属するのだ。或るいは：「彼は痛みを持っている」という言葉で行われる言語ゲームには、振舞の範例が属するのみならず、痛みの範例もまた属するのだ。——[しかし、]「痛み」という語で行われる言語ゲームには、痛みの像が入り込む。」と言うことは、誤解である。痛みの想像は[痛みの]像ではない。そしてこの想像は、この言語ゲームにおいては、我々が像と呼ぶであろう何か或るものによって置き換えられる事も出来ない。——確かに痛みの想像は、或る意味で、「痛み」という語で行われる]この言語ゲームに入り込む；ただ[しかし]像として、ではないに。

301. 想像は像ではない。しかし、像は想像に対応し得る。[ソール A. クリプキ、黒崎 宏訳『ウィトゲンシュタインのパラドックス』産業図書(1983) pp. 268-271. 参照。]

302. 人は他人の痛みを自分の痛みをモデルにして想像しなければならぬ、とすれば、それはあまり簡単な事ではない：何故なら私は、私が感じる痛みに基づいて、私が感じない痛みを想像しなければならないのであるから；詳しく言うと私は、想像上——[例えば、]手の痛みから腕の痛みへ、のように——痛みの場所を単に或る所から別の所に移さなくてはならない、というのではないのである[から]。というのは私は、私は彼の身体の或る所に痛みを感じる、という事（これもまた可能であろう。）を想像しなくてはならない、というのではないのである。[実は、人が他人の痛みを自分の痛みをモデルにして想像することは不可能なのである。]

痛みの振舞は、痛みの場所を指示することが出来る。——しかし、[痛みの振舞が、そしてまた、痛みの場所が、痛みに苦しんでいるのではなく、]痛みを表出している人が、痛みに苦しんでいるのである。

303. 「私は、他人が痛みを持っている、という事はただ信じることが出来るのみであるが、しかし私は、私[自身]が痛みを持っているときには、その事を知っている。」——さよう；人が、「彼は痛みを持っている。」と言う代わりに「私は、彼は痛みを持っている、という事を信じている。」と言う決心をする事は、可能である。しかし、それはそれだけの事である。——ここで説明のように、或るいは、[信じている、という]心的過程についての言明のように見えるものは、その実は、或る言い方を他の言い方——哲学するときには、我々により適切に思われる言い方——に替えた[だけの]ものなのである。

まあ、[哲学するときではなく]現実の場面で、他人の不安や痛みを疑ってみよ！ [多くの場合には、疑い得ないであろう。]

304 「しかし、それでも君は、[実際に] 痛みのある〈痛みの振舞い〉と [実際には] 痛みのない〈痛みの振舞い〉の間には違いがある、という事を認めるでしょう。」——認める [でしょう、だって]? [そんな事は当たり前でしょう。] [それよりも] もっと大きな違いなど、あり得ますか! ——「それでも君は、繰り返し繰り返し、感覚それ自体は無いのである、という結論に達していますね。」——とんでもない。[確かに] 感覚は、或るものではない。しかしまた感覚は、無いものでもないのである! 結論はただ、[かく言うときの] 無いものは、——それ [自体] については何も言えない——或るものと同じ働きをするのだ、という事であったのである。[(293を参照。)] 我々はただ、ここで我々に [執拗に] 付き纏うであろう文法を拒否しているのである。

[この様な] パラドックス [と思われるもの] は、言語は常に一通りの仕方で働くのだ、[言い換えれば、] 言語は常に同じ目的に奉仕するのだ、という理念から、我々が根源的に決別するときのみ、消えるのである。ここに、[かく言うときの] 同じ目的とは、思っている事——さよう、それは、家、痛み、善悪、その他なんであれ、について思っている事であるが——を伝えるという目的、なのである。

305. 「しかしそれでも君は、例えば [何かを] 思い出しているとき、或る内的過程が生じているという事を否定し得ない [でしょう]。—— 一体何が、我々は [内的過程といった] 或る事を否定したがっているのだ、という様な印象を与えるのか? 人が「[何かを] 思い出しているとき、やはり、或る内的過程が生じているのだ。」と言うとき、——それに続けて人は「確かに君は、その内的過程を見ているのだ。」と言うであろう;

そして、人が「思い出す」という語で意味しているのは、まさにこの内的過程である〔、と言うであろう〕。——我々が〔内的過程といった〕或る事を否定したがっている、といった印象は、我々は「内的過程」という像に反抗している、という事に由来するのである。我々が否定するのは、内的過程という像は「思い出す」という語の使用に関して正しい理念を与える、という事なのである。さよう、我々が言う事は、こうなのである：〔内的過程という〕この像は、それに纏わり付く色々な事〔——例えば、内的過程は見える、といった事——〕と一緒にあって、我々が語の使用をそのあるがままの姿で見る、という事を妨害するのである。

306. そうであるとすれば、何故私は、心的過程がそこにある、という事を否定しなくてはならないのか?!〔否定する必要など全くない。〕「……について思い出すという心的過程が、私に今起こった。」という事は、「私は今……について思い出した。」という事に他ならないのである。〔したがって、〕心的過程を否定するという事は、思い出すという事を否定する事なのである；とにかく、誰か或る人が或る事を思い出すという事を否定する事なのである。

307. 「それでも君は、偽装した行動主義者ではないのか？ それでも君は基本的には、人間の振舞い以外は全て虚構である、と言っているのではないのか？」——もし私が虚構について語るとすれば、それは文法的虚構について、である。〔語の意味としての内的過程、という像は、文法的虚構であろう。〕

308. 如何にして、心的過程、心的状態、および、行動主義に関する哲

学的問題が生ずるのか？ ——その第一段階は、全く目立たないものである。〔それは、〕我々は〔心的〕過程と〔心的〕状態について語り、そしてそれらの本性については、何も決めないままにして置く〔という事な〕のである！ 我々は、恐らく何時かは、それらについてより良く知るようになるであろう——と思うのである。しかし、まさにこの事によって我々は、或る一定の見方を強要されるのである。何故なら、或る〔心的〕過程〔や心的状態〕をより良く知るようになる、という事が何であるかについて、我々は或る一定の概念を持っているのであるから。（〔まさに此処において〕手品師の手品における決定的な一歩が、踏み出されるのであるが、どうやらこの一歩は、我々には、無害であると思われるのである。） ——そして今や、我々に我々の考えを納得させる筈のこの〔心的過程や心的状態という〕比喻は、崩壊するのである。かくして我々は、未だ探究されていない〔心という〕媒質の中の、未だ理解されていない過程〔等というもの〕を、否定せざるを得ないのである。そしてそれ故、我々は心的過程を否定したのだ、と思われるのである。しかし勿論、我々は心的過程〔そのもの〕を否定しようなどとは思いはしない！

309. 哲学における君の目的は何か？ ——蠅に蠅取り壺からの逃げ道を示すことである。

310. 私が或る人に、私は痛みを持っている、と言う。彼の私に対する態度は、その時、〔本当に私は痛みを持っている、という事を〕を信じている態度；信じていない態度；疑っている態度；等々、であろう。

〔私が彼に、私は痛みを持っている、と言ったのに答えて、〕彼が「それはそれ程ひどくはないであろう。」と言う、としよう。——彼がそう言

うという事は、彼は[私の]痛みの表出の背後にある[〈痛み〉という]或るもの[の存在]を信じている、という事に対する証明ではないのか？

——[そうではない。]彼の態度は彼の態度の証明である。[彼が「それはそれ程ひどくはないであろう。」と言う事に示されている彼の態度は、彼は[私の]痛みの表出の背後にある[〈痛み〉という]或るもの[の存在]を信じている、という事を証明しているのではない。もし、証明という事を言うとするれば、彼の態度は彼の態度の証明なのである。][私が言う]「私は痛みを持っている。」という命題のみならず、それに対する[彼の]答え「それはそれ程ひどくはないであろう。」をもまた、[私や彼の口をついて出る]自然な音と振舞いで置き換えてみよ！[そうすれば、彼の態度は彼の態度の証明である事が、分かるであろう。]

311. [君は304で言った。][「実際に痛みのある〈痛みの振舞い〉と実際には痛みのない〈痛みの振舞い〉の違いより]もっと大きな違いなど、あり得ますか！」——痛みの場合には私は、[実際には痛みのない場合に]私はこの違いを自らに私的に提示する事が出来る、と信じる。[そうであろうか？ そうではないのではないか？]しかし、折れた歯と折れていない歯の違いならば、私は誰にでも提示することが出来る。——しかし、私的な提示のためには、君は痛み[そのもの]を生じさせる必要は全くないのであり、君は痛みを想像しさえすれば、——例えば、ちょっと顔を歪めさえすれば——それで十分なのである。しからば、その様にして提示したものが、痛みであって、例えば顔の表情ではないという事を、君は知っているのか？ 君はまた、君がそれを提示する前に、何を提示すべきかという事をも、如何にして知るのか？ その様な私的提示は、幻想なのである。

312. しかし、歯の場合と痛みの場合、それでもやはり似てはいないであろうか？ 何故なら、歯の場合における「それを見る」視覚は、痛みの場合における「それを感じる」痛みの感覚に、対応しているのだから。私は視覚を、良くも悪くも、痛みの感覚と同様に私に提示出来るのである。

[私的ではない] 次のような場合を想像せよ：我々の周囲にある物（石、植物、等々）の表面には、そこに触ると我々の皮膚に痛みを引き起こす箇所や部位がある。（例えば、その表面の化学的性質によって、である。しかし我々は、[今は] その事 [の具体的メカニズム] について知る必要はない。）この様な場合には、我々は、今日我々が或る特定の植物の赤い斑点を持つ葉について語るように、[或る特定の植物の] 痛みの斑点を持つ葉について語るようになるであろう。[痛みを、感覚として、ではなく、物の性質として、語るようになるわけである。] 私が想像している事は、こうである：その様な斑点とその形についての知覚は、我々にとって有用であろう；我々はその知覚から、その物の重要な特性について推論することが出来るであろう。

313. 私は痛みを——赤を提示するように、そして、直線、曲線、木、石、を提示するように——提示する事が出来る。——[私的ではない] この提示を、我々はまさに「提示」と呼ぶのである。

314. もし私が、感覚の哲学的問題を明らかにするために、現在の私の頭痛の状態を観察しようとするならば、それは根本的な誤解を示している。[哲学的問題を明らかにするものは、それが係わる語に関する文法的解明なのである。]

315. 未だかつて痛みを経験した事のない人は、「痛み」という語を理解し得るであろうか？ [理解し得る。] —— その様な人が「痛み」という語を理解し得るか否かということは、経験が私に教えてくれるべき事なのであるか？ [そうではない。] —— そして、もし我々が「かつて痛みを感じた事のない人は、痛みを想像する事が出来ない。」と言うならば、—— どうして我々はその事を知っているのか？ その事の本質は、如何にして決定されるのか？ [文法的考察によって、決定される。]